

## 『マクベス』

—「ミスキャストされたものたち」のドラマ—

鈴木 豊子

1606年頃、『ホリンシェッド年代記』(Holinshed Chronicle)を主な材源として、シェイクスピアが書いた『マクベス』(Macbeth)の物語は、およそ次のようなものである。

スコットランドの名将、ダンカン(Duncan)王の片腕として、人々の信望を一身に集めていたマクベス(Macbeth)の運命は、雷鳴轟く暗黒の荒野で、三人の魔女に遭遇したことから、大きく変転していく。「万歳、マクベス、グラームズ(Glamis)の領主! 万歳、マクベス、コーダー(Cawdor)の領主! 万歳、マクベス、将来の国王!」(1. 3. 48-50)<sup>1)</sup>魔女は、マクベスの未来の栄達を予言したのだ。その言葉に呪縛されたかのように、マクベスは、妻と共に謀してダンカン王を弑逆、王位に就く。しかし、引き返すことのできない血の河に足を浸してしまったマクベスは、恐怖と保身の思いから、その後も次々と殺人を重ね、ついにマクベス夫人(Lady Macbeth)は狂死、マクベス自身も、ダンカン王の遺児らに討たれて、その生首を舞台に晒す。

この粗筋をみてもわかるように、『マクベス』の“title role”は、主役であり、同時に悪役であるという複雑な性格をもっている。したがって、このドラマを悲劇として成立させるためには、作者は悪役であるマクベスに対し、「最後まで観客の共感を維持する」——という難事業に取り組まねばならなかった。シェイクスピアは、どのような技法を用いて、それを行ったのだろうか。以下、このドラマの主人公を、「ミスキャストされたもの」という演劇的隠喩で捉え、シェイクスピアの観客操作に注目しながら、この問題を考察していきたいと思う。

## I

『ハムレット』(Hamlet)が“to be”の芝居であるとするならば、『マクベス』は“to do”の芝居である

といわれる。『マクベス』においては、演ずる者は自己の意志に反して(あるいは自己の資質に反して)つねに周囲から「行為すること」を強要される。(ちょうど舞台に立つ俳優が、その役を選んでしまった以上、自らの意志を越えた演技や行為を強制されつづけるように....)

この劇の主役マクベスの役割は、「王を殺害し、王権を奪取すること」であり、「男らしく、事を為すこと」である。彼はこの役をうまくこなせるのだろうか。いささか不安な気がしないでもない。たしかにマクベスは、その戦場での奮戦ぶりを「軍神ペローナの花婿」(1. 2. 55)と称えられる勇猛果敢な武将ではある。しかし、同時に「詩的想像力と感受性に富み」、妻であるマクベス夫人の言葉を借りるならば、「人情のミルクが多すぎる」(1. 5. 17)という「欠点」をもつ人物でもある。すこしこの役にそぐわないのでは、という懸念もわく。だが、これが与えられた役である以上、マクベスはこの役を演じきらねばならない。「将来の国王」(1. 3. 50)という、「魔女からの保証」も与えられたではないか....

彼は「王権を主題とする壮大な芝居にふさわしい、華やかな幕開きだ」(1. 3. 128-29)と、みずからこの劇のコーラス役に仕立て、以後傍白や独白を多用して、観客に劇の動きを伝え、さらに、自分の意識を垣間見せていく。

....あの不可思議ないざないは  
悪いはずはない、いいはずもない。

. . . . .

いいならばなぜおれは王位への誘惑に屈するのだ、  
それを思い描くだけで恐ろしさに身の毛もよだち、

....おののく心臓が  
激しく肋骨を打つではないか? (1. 3. 130-37)

マクベスの言葉は、華やかな幕開きには、どこか不似合いだ。「悪のはまり役」——「ヴァイス」の直系を誇るリチャード三世（King Richard III）なら、もっと軽やかに、もっと楽しんで悪の企みを語る。

この胸に秘めたおれの企みが実現すれば  
クラレンスも明日はこの世にはいない。そのあと  
エドワード王も神のみもとにお召しいただければ  
天下はおれのもの！ (1. 3. 149-52)<sup>3</sup>

だが、マクベスは、ぶざまでごちなく、額に恐怖の脂汗をにじませ、まるで「血を流すように」悪への傾斜を語る。

.... 眼前の恐怖も

想像力の生み出す恐怖ほど恐ろしくはない。  
心に描く殺人はまだ想像にすぎないのに、それが  
この五体をゆさぶり、思い浮かべるだけで  
その働きは麻痺し、現実には存在しないものしか  
存在しないように思われる。 (1. 3. 137-42)

観客は自分たちだけが舞台の秘密を覗き、そのため、つねにマクベスの意識を共有して共犯者の戦慄を味わう。「マクベスの果たすべきことは外から決められているのに、彼の思考、彼の感覚が常に彼の意に反して観客にひらかれている」ためといえるだろう。

## II

この「一大事」を直ちに、マクベスは妻に手紙で書き送る。「偉大なる地位を共にする、かけがえのないおまえに、どのような地位が約束されているかも知らせず、喜びを分かちあうべき機会を失わせたくなかったのだ....」(1. 5. 11-13)

マクベス夫人は「喜びを分かちあうべき」マクベスの「分身」である。彼女の役どころは「マクベスを叱咤激励し、事を為しとげさせること」だ。

手紙を読んだ夫人はさっそく、「悪霊」や「暗闇の夜」に祈りを捧げ、役作りに励む。

.... さあ、死のたくらみに手を貸す悪霊たち、この私を  
女でなくしておくれ、頭のとっぺんから爪先まで  
残忍な気持ちでみたしておくれ！ 血を凝らせ、  
やさしい思いやりへの通り道をふさいでおくれ、

あわれみ深いところが訪れて、私の決意をゆさぶ  
り、  
その決意が恐ろしい結果を生み出す邪魔をしたり  
しないように....

.... きておくれ、暗闇の夜よ、  
どす黒い地獄の煙に身を包んで、早く、ここへ。  
私の鋭い短剣が自分の作る傷口を見ないですむよ  
うに.... (1. 5. 40-52)

彼女はこの役を無事果たすることができるのだろうか。台詞を聞くかぎり、かなり「悪」ぶってはいる。しかしゴネリル（Goneril）やリーガン（Regan）と比べると、どうしても貫禄不足のようだ（天賦の才を与えられた彼女たちなら、そんな祈りなどまったく必要としないだろうから）。

だが、マクベス夫人は、その役を演じなければならぬ。インヴァネス（Inverness）の館に戻るやいなや、決意を鈍らせ、逡巡する夫を、彼女は「叱咤激励」する。

.... これからは

あなたの愛もそんなものだと思うようにしましょ  
う (1. 7. 38-39)

.... 私は子供を育てたことがあります。  
自分の乳房を吸う赤子がどんなにかわいいか  
知っています。でも私はほほえみかける赤子の  
やわらかい歯茎から私の乳首をもぎ取り、その脳  
味噌を  
叩き出してみせましょう。さっきのあなたのように  
いったんやると誓ったからには。 (1. 7. 54-59)

マクベスは、ますます追い詰められる。「王権を主題とする壮大な芝居」には、いつのまにか「愛の証明」という副題まで付けられている。だが彼は愛する妻のためにも、この役を果たさねばならない。「よし、心は決まった」(1. 7. 80) と、彼は妻に答える。二人は「勇気という弦の元締めを、ぎりぎりまで引き絞って」(1. 7. 61) 事に臨もうとする。

## III

「やっしまえばすべてやっしまったことになる  
なら／早くやっしまおうにかぎる」(“If it were done,

when 'tis done, then 'twere well/ It were done quickly . . .”) (1. 7. 1-2) — 殺人決行の直前まで、マクベスの「為す」は、「受け身」で語られていく。「幻の短剣」や、合図の「鐘の音」に導かれて、彼は「引きずられるように」<sup>6)</sup> 犯行に赴く。殺人は舞台の外で行われ、フクロウやコオロギの声まで聞き取れる (2. 2. 15) 静寂の中で、観客は、待機するマクベス夫人の恐怖と慄きを共に味わう。

奥で人声が聞こえ、マクベスが現れる。「おれはやったぞ」 (“I have done the deed.”) (2. 2. 14) 彼ははじめて「能動形」で語る。だがマクベスは、「アーメン」という言葉が喉につかえたこと、「もう眠りはない、マクベスは眠りを殺した」という叫び声が聞こえたことをひたすら妻に訴え、観客は、彼がまるで被害者であるかのような錯覚を覚えさせられる<sup>7)</sup>。

突如、戸外でけたたましいノックの音。思わず、自らの手を見たマクベスの目は恐怖で見開かれる。

なんという手だ、ああ、おれの目をえぐり出す気か。  
大ネプチューンの支配する大海の水すべてを傾ければ、  
この手から血を洗い落とせるのか？ いや、むしろこの手が  
うねりにうねる大海原の水を朱に染め、  
その緑を真紅に一変させてしまうだろう  
(2. 2. 58-62)

ノックの音は、なおも激しく続く。そんなことを言っている場合ではないのだ。「ほんの少し水があればきれいに消えてしまいます」 (“A little water clears us of this deed . . .”) (2. 2. 66) と、マクベス夫人は言う。この台詞を「こともなげに」言い放ったが故に、彼女は、その残酷さと無神経さを後世に残す。だが、そんなト書きはどこにも見当らない以上、この言葉は、つねに「叱咤激励」することを強要されるマクベス夫人が、自分も恐怖に動転しながら、死に物狂いで発した悲鳴のような叫びであったかもしれない。ギリギリまで引き絞られた彼女の精神の弦は、もはや切断寸前である。

#### IV

事は成り、二人は王位に就いた。だが、まだその役から解放されたわけではない。二人はまだその役を

「為し」続けねばならない。

「こうしているだけではなんにもならぬ、安心してこうしているのではなければ . . .」 (3. 1. 47) と、マクベスは言い、「望みはとげても、すべては無意味、心に満ち足りた安らぎがなければ . . .」 (3. 2. 4-5) と、マクベス夫人は呟く。

マクベスの心には、無数のさそりが巣くっている (3. 2. 36)。そのさそりを殲滅すべく、彼は、もはや弦の切れかかった妻を当てにせず、ひとりでバンクォー (Banquo) 暗殺を画策、実行する。よりによって就任祝賀の大宴会が行われるという日に！

晴れやかな宴席に、血まみれのバンクォーの亡霊が座っている。マクベスは動転し、狂態を尽くして、祝宴をぶち壊す。ここでも、亡霊はマクベスと観客にしか見えず、観客はマクベスのグロテスクな恐怖を、共に味わう。

領主たちは、疑惑と当惑の念を抱いて退席、惨憺たる宴の後には、ホスト役を演じ損ねたマクベスと、事情が飲み込めぬまま、手探りの演技を強いられた妻だけが取り残される。「あなたに必要なのは、いのちをよみがえらせる眠りです」 (3. 4. 140) — 叱咤激励に疲れ果てたマクベス夫人は、すこし調子を和らげて言う。彼女は、まだ眠ることができる。だが、その眠りはやがて、目覚めつつ眠り、眠りつつ目覚める、「港のない船」 (1. 3. 16) の眠りになることを彼女は知らない。切れかかったマクベス夫人の弦は、もはや「風前の灯」である。

#### V

宴席での失態の後には、行為を重ねるごとに事態は悪化していく。ファイフ (Fife) の城主マクダフ (Macduff) の逃亡を知ったマクベスは激怒し、今後は「心が動いた瞬間に、手を動かす」 (4. 1. 146-47) ことを決意する。城に取り残されていたマクダフの妻子以下全員を殺害させたのだ。

もはや人心はマクベスを離れ、各地で反乱が相次ぎ、家臣も逃亡。イングランドでは、マクダフが、ダンカンの遺児マルコム (Malcolm) を擁して挙兵する。

そのような混乱の中、一人の侍女が、マクベス夫人の異変を伝える。

陛下が出陣されてからのことです。ベッドから起き上がると、部屋着を羽織り、戸棚の鍵を開

け、紙をとり出し、それを二つに折り、なにやら書き記し、読み直し、封印しそしてベッドに戻られるのですが、そのあいだずっとお眠りになったままなのです。（5. 1. 4-8）

マクベス夫人は、もはや、強いられた役を演じ続けることはできない。もはや彼女は、定められた台詞を、台本通り喋ることはできない——無意識の中で、彼女は抑圧された意識を演じ、押さえても噴き出すきれぎれの言葉を紡ぐ。

消えておしまい、忌まわしいしみ！ 消えろというのに！——一つ、二つ。さあ、いよいよやるべき時刻——なんて地獄は暗いだろう！ ……ファイフの領主には妻があった。いまはどこ？——ああ、この手は二度ときれいにならないのかしら？ ……まだ血の臭いがする。アラビアじゅうの香料をふりかけてもこの小さな手のいやな臭いは消えはしまい。ああ、ああ、ああ！

（5. 1. 33-49）

## VI

暴君と化したマクベスも、分身である妻にはやさしい。病状を告げられた彼は、医師に語りかける。

それをなおしてやってくれ。

おまえにも心の病は手に負えぬと言うのか？  
記憶の底に根を張った悲しみを抜きとり、  
脳裏に刻みこまれた悩みをぬぐい去り、  
忘却という甘い解毒剤を用いて、重い胸から  
心押し潰す危険な思いを洗い流す、それが  
おまえにもできぬというのか？ （5. 3. 39-45）

それは、マクベス自身が求めていたものであったのかもしれない。残虐な暴君を演じ、「この骨から肉がそぎ落とされるまで」（5. 3. 32）戦い抜く猛将として振るまいながらも、マクベスの中にはつねに、そのような自己を凝視し、ことの成り行きを冷やかに見守る、もう一つの醒めた眼差しがあった。そんなマクベスが決戦の直前に語る言葉、それは出陣の雄叫びとは程遠い台詞となる。

思えば長いこと生きてきたものだ、おれの人生は黄ばんだ枯れ葉となって風に散るのを待ってい

る。  
それなのにどうだ、老年にふさわしい  
栄誉、敬愛、従順、良き友人たちなどなにな一つ  
おれには期待できそうもない。そのかわりに響いてくるのは、  
高くはないが深い呪詛の声、口先だけの敬意、追従だ、  
それをしりぞけたくともこの弱い心にはそれはできぬ。（5. 3. 22-28）

## VII

バーナム（Birnam）の森近くに、敵軍が押し寄せるさなか、突如、城内で悲鳴が起きる。マクベス夫人がついに、その役を「降りて」しまったのだ。何という誤演！ 彼女が「叩き出してみせる」のは、「ほほえみかける赤子の脳味噌」であったはずなのに…

マクベスは、かけがえのない「分身」を失ってしまった。彼は今やほとんど生きる意味を見いだせない。妻の後を追うように、彼もまた、その役を演じ損なう。決戦の「檄」を飛ばすべきときに、場違いな「語り」を語ることによって…

明日、また明日、また明日と、時は  
小さきみな足どりで一日一日を歩み、  
ついには定められた時の最後の一瞬にたどりつく、  
明日という日はすべて愚か者が塵と化す  
死への道筋を照らしてきた。消えろ、消えろ、  
つかの間のともし火！ 人生は歩きまわる影法師、  
哀れな役者だ、舞台の上でおおげさにみえをきっても  
出場が終われば消えてしまう。それは白痴の語る物語、響きと怒りに満ちているが、  
意味はなに一つありはしない。

To-morrow, and to-morrow and to-morrow,  
Creeps in this petty pace from day to day,  
To the last syllable of recorded time;  
And all our yesterday have lighted fools  
The way to dusty death. Out, out, brief candle!  
Life's but a walking shadow; a poor player,  
That struts and frets his hour upon the stage,  
And then is heard no more: it is a tale

told by an idiot, full of sound and fury,  
Signifying nothing. (5. 5. 19–28)

マクベスは悟った——すべては無意味であったと…彼は、自分がまずく演じてしまった“poor player”であり、「王権を主題とする壮大な物語」は、「白痴の語る物語」にすぎなかったことを痛切に感じる…

しかし、このミスキャストされた男の悲劇的な自己認識は、その「無意味さ」を語ることによって、逆に、われわれに意味を与えつづける<sup>8)</sup>。爾後四百余年に亘って…

すべての、役柄に合わない役を押しつけられ、納得のいかない行為を強いられて生きる観客たち、すべての、存在の意味を解しえず、“poor player”の役を演じつづければならないわれわれ——は、マクベスの「語り」を共有し、自らに問いつづける——“Signifying nothing?”と。

## 結 び

「メロドラマや道徳劇においては」と、ロバート・ハイルマン (Robert Heilman) は言う、「われわれは、一連の出来事を距離を置いて眺める。しかし、悲劇においては、われわれは、その出来事に参加し、共に行動するのだ…」<sup>9)</sup>

『マクベス』のミスキャストされたものたち——マクベス、マクベス夫人——“villain”の役を振り当てられたかれらは、その役割と演技の「ずれ」によって、あるいは、その意識と行動の「乖離」によって、かえってわれわれの共感を呼ぶ人物となり、そのことによって『マクベス』を「恐怖と哀憐の情を呼びおこす」<sup>10)</sup>悲劇として成立させている。

『マクベス』は、けっして勸善懲悪のメロドラマでもなければ、寓意的な教訓を与える道徳劇でもない。それは、悪役を悲劇の主人公と為し得たシェイクスピアの力業が生みだした、永遠の、究極の悲劇の一つであると言えるだろう。

## 注

- 1) Kenneth Muir, ed., *Macbeth*. Arden Shakespeare. (London: Routledge, 1992) 以下このテキストからの引用は、その後に幕、場、行数を入れて示す。尚、引用の和訳は福田恆存訳『マクベス』新潮社 1991、小津次郎訳「マクベス」筑摩世界文学大系 16『シェイクスピア』筑摩書房 1975、木下順二訳『私のマクベス』講談社 1993、小田島雄志訳『マクベス』白水社 1987、を参考にさせていただいた。
- 2) A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy*. (London: Macmillan, 1951), p. 295.
- 3) Antony Hammond, ed., *King Richard III*. Arden Shakespeare (London: Methuen, 1981)
- 4) Mark Van Doren, *Shakespeare*. (Henry Holt and Company, 1939), p. 185.
- 5) 渡辺喜之「マクベス」玉泉八州男他編『シェイクスピア全作品論』(研究社, 1992), p. 304.
- 6) 同書, p. 307.
- 7) Robert B. Heilman, “The Criminal as Tragic Hero: Dramatic Method” in Kenneth Muir and Philip Edwards eds., *Aspects of Macbeth*. (London: Cambridge UP, 1980) p. 31.
- 8) 安西徹雄「シェイクスピアと『語り』(補遺)」飯野友幸編『英文学と英語学』384-76 (上智大学, 2002) 8. シェイクスピア悲劇の幕切れにおける「語り」の多くは、劇の発端から大詰めの瞬間まで、劇のアクションの総体を一挙に凝縮し、その意味するところをもっとも深い次元で観客に認識させ、劇経験の完成をもたらす。それは観劇体験を「解釈学的経験」へ変容させ、その意味を結晶として析出するものである。
- 9) Heilman, p. 28.
- 10) 高沖陽造『悲劇論』(創樹社, 1994), p. 72.